# 明治戊辰戦争におけるウイリスの診療記録とその評価

## ―日本人医師による越後口戦傷者記録を中心として―

蒲原　宏

ウイリス（William Willis 1837―94）の明治戊辰戦争傷病者の治療についての記録は、順天堂大学山崎文庫所蔵（七七六三号）の筆者不明の「英国大一等之医師宇理宇私先生胗（ママ）察録」が知られている。

これは慶応四年九月二日から九月二十日までの診療記録であるから、ウイリスが越後高田へ到着したのが慶応四年八月二十七日（一八六八・十・十二）であるところからすると、到着五日後からの高田での診療と一四日後の（一八六八・十・二十六）柏崎への移動後の柏崎大病院での診療が記録されていることになる。総数一六九名の診療が行われている。

そのうち切断術が九例みられるが、各症例の記録は姓名、藩名、創傷の部位、処置、処方を簡略に記している。傷病者の所属は、長州八三、薩州三六、十津川一七、御親兵二四、高田八、松本一となっているので、この診療録の記録者は長州藩か薩摩藩所属の医師の可能性があると推定することができるのではあるまいか。鉄のスプリント使用の記事も見られる。

もう一つのウイリスの明治戊辰戦争戦傷病者診療記録は、越後国蒲原郡下栗林村（現・新潟県三条市）の医師池田玄斎（一八三九～一九〇四）の記録した『北陸道大病院ウイリス先生診察記』がある。これは村医池田玄斎が柏崎大病院診察方助役として徴用された時に記録したものである。これは㈠『慶応四戊辰之役各藩傷病者姓名録并ニ図』（四四丁）㈡『慶応四戊辰之役各藩傷病者姓名録并ニ図』（三五丁）の二冊からなり、前者には慶応四年九月十八日からの戦傷者六三名、後者には慶応四年七月二十五日から発生した戦傷者七一名が記録されている。後者に綴られて前記『北陸道大病院ウイリス先生診察記』として、同年八月四日保内村で受傷した薩州藩相良庄ヱ門（十九歳）が九

月十三日に上腕の切断術を受け、同月十六日に死亡した記事を筆頭に五四例の記録が図示されている。全記録とも人形図に受傷部位を彩色記録をもって図示し、所属藩名、姓名および、受傷部位、予後が記録されているが、各藩兵ばかりでなく、戦闘の巻き添えを受けた戦乱地域の住民も柏崎大病院に収容されていたことが知られる。記述は簡略である。その内容は、薩州藩一五、長州藩一一、長府藩一〇。一般住民では、筒葉村五、長岡四、大口村一、脇野町三、出雲崎三、中之島村二の計五四例である。

各症例の戦傷部位、処置、予後について柏崎大病院での集計を行い、当時の野戦病院的医療の水準とウイリスの治療の具体例について検討した成績を報告し、シッドル(Joseph Bower Siddall 1840—1925)の報告した『日本陸軍病院戦傷者記録』と比較した結果について述べる。池田玄斎が勤務した当時の柏崎の北陸道大病院の医師構成は次のようであった。

北陸道大病院官医録(池田玄斎による)

院長…(長州)赤川玄樑　副院長…(越前)橋本彦也　取締…二階堂良選　器械方…竹田仙安、朝枝猶橋　書記官…(水府)会沢正名、(越前)浅野恭斎

右会議所役員

東廻診局…(長州)伊東生眠、福原謙吉、山根香中、鴻善真平、原田英伯、村田謙二、岸禮補、田中杏平、岡本秀二、(高田)坂本文彦

西廻診局…(土州)溝口辰吾、島田洞悳、岡村并樹、生駒矜一郎、(土州助役)海津裕琢、池田玄斎、(薩州)南仲庵、川添登理、栗崎道意、新宮拙造、丸田杏平、(加州)明春丈、藤田春堂、細村良貞、音渡雙鶴、小坂大安、(芸州)松井良逸、(松代)原桂仙、阿藤隆岱、倉田高順、吉田一安、(上田)香山杏林、(松本)小松齢司、(越前)三碕宗玄

薬局…(高田)上野貞斎、(長州)村田文庵、(尾州)石川良三

調合局…(長州)三浦文作、品川淳輔、三好三省、重村垣哉、豊田郁二、大滝茂峯、(新発田)坂上昌哲、(越前)小林玄造、(高田)大森隆石、(高崎)吉田道生、(柏浦)渡辺貞順、(佐州)高津善長

先鋒病院…(御親兵医官)溝口順益、高橋陸郎、(高田)

鈴木清斎、宮川道生、神岡玄良、藤林良文、伊那玄伯、茅野潤民、江坂文貞、土領養安、鰐石栄宅、松永頼石、松永峰太郎、竹田浩哉、（新発田）稲垣周栄、（柏浦）海津祐琢、桜井東一郎、（小地谷）木村東眠、（関原）木村謙斎

この記録にはないその他の柏崎北陸道大病院勤務を加えると、柏崎町聞光寺を中心として行われた軍陣医療に動員された要員は膨大なものであったと推定できる。池田玄斎が記録した患者だけでも計一八六名であることからも、この病院での診療症例もまた膨大なものであったことが推定される。現存している当時の診療録を資料として、当時の医療の実際を軍陣外科学的な視野から具体的な症例検討を行い、その結果を報告する。戦乱のあった越後地方の在野医師が詳細に記録した新発掘の『北陸道大病院ウイリス先生診察記』を紹介し、あわせて幕末明治初期のウイリスの医療活動を再評価してみたい。

（新潟医学洋学史研究所）

# 鎌倉幕府の京下官医受容形態の考察

奥富敬之

## 問題点

古代末期以来の京都政権の形骸化と中世初頭の鎌倉幕府の成立とは、典薬寮・施薬院などに本拠を置いていた官医の多くを、鎌倉に下向させることになったと思われる。このことは、中央の先進医学を地方に伝播させることになったはずである。

本小論は、官医の鎌倉下向に対する幕府の対応態度と、これによる官医の鎌倉における存在形態との解明を図ったものである。便宜上鎌倉幕府政治の三区分に従って、主要な史料の概要を列記し、その評価、解釈などは学会の席上で述べたいと思う。

### 将軍独裁制期

この時期における幕府と官医との交渉は三例ある（『吾